国際教養学部

国語

（問題）

2019年度

〈H31132021〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は2～8ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

（2）マーク欄にははっきりとマークすること。訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。また、マークシートに消しゴムのかすを残さないこと。

マークする時	●良い	○悪い	◎悪い
マークを消す時	○良い	○悪い	◎悪い

5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。

7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

8 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

（一）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

戦後にあって、日常の側から思想を論じる時、信憑（びょう）するに足る論とは、やはり戦前、そして戦中と、［　A　］の中にある。敗戦という事態も、彼らにとっては動じる対象ではなかった。そして彼らは各々が続けてきた戦中からの思索に立ち、戦後の指針を示そうとした。

戦後の柳田国男が著した「窓の灯」（一九四六年一二月）は、当時の彼の立脚点をよく示している。この中で、柳田は敗戦直後の状況を概観して、「日本人の予言能力は既に試験せられ、全部が落第ということにもう決定したのである」という厳しい評価を下した。民俗学の輪郭が整った一九三五年、柳田は『郷土生活の研究法』において、「帰納による当然の結論」を前提に、その方法に沿って民間の習俗を比較綜合していけば、眼前の生活改善をはじめ、広く民間が抱える生活苦の諸相も分かるとした。

民間における習俗に照らせば、「帰納による当然の結論」とは、こういうことを行ったら、その反応はこう返ってくる、という感覚である。それは本来、日々堆積する生活体験の中で身に付いていく。そこから下される判断は、毎日の営みを基礎とした、健全さと分かりやすさを伴っている。未曽有の戦カ[1]、そして敗戦という事実を前にして、かつて自身が描いた展望を交差させる時、甲柳田が抱いた慚愧（ざんき）の念はひときわ強いものだった。そこから眼をそらさず、戦後に向けてひとつ石を置くべき必要に柳田は直面していた。

戦後世界に向けて柳田が示した意気ごみを示すものとして、一九四六年一〇月五日、日本民俗学講座での講演「現代科学ということ」がある。この中で柳田が強調したのは、民俗学とは古い時代を穿鑿（せんさく）するものではなく、一個の「現代科学」として捉えられるべきであり、その視点から究明されるべき問題として、「どうしてこうも浅ましく国はやぶれてしまったか」、「これからはどういう風に進んで行けばよかろうか」という二つの問題を据え、ことに前者を明らかにすることの大切さを説いた。「浅ましく」やぶれたのかを考えることは、戦争体験を単に情報としてだけでなく、それをくぐって得られた洞察力を持つことでもある。

戦後、丸山眞男は情報過剰な社会の中で、経験から学び思考する「叡智」の部分が欠如していることを難じたが、これは情報の速度・伝達が特化し、情報そのものに対する洞察が抜け落ちていることをキ[2]惧した発言といえよう。「叡智」という部分に引っ張られて、これを進歩的知識人の常套句とみなすことは危険である。重大な情報とは、長い時間軸の中で、それに対する洞察とともに伝えられていかなければならない。民俗学がその「現代性」をもって果たすべきものとして柳田が据えた課題とは、［　B　］、ということでもあった。

民間で洞察力を養っていく場合、日々使われる言葉の在り方が問われてくる。ここで柳田は洞察力を磨く観点から日本語について論じている。

戦後の柳田は一九四八年一二月に設立された国立国語研究所に評議員として参画したほか、『新しい国語』の監修も手がけ、戦後の国語教育に取り組む機会を持った。ここで参照すべきは、一九四六年一月から四回にわたり『展望』に連載された「喜談日録」である。この中で柳田は、まずは日本語を細かく聴き分ける能力を持つべきことを掲げ、さらに「聴く力の修練に先立って、各自に考えるという習慣を付ける必要があり、それにはめいめいの思う言葉というものを、十分に持たせて置く必要があった」とした。

「めいめいの思う言葉」とは、柳田らしい含みを持った表現だが、少なくとも型にはまった言葉に陥らないことが念頭に置かれていたことは疑いない。その際、柳田が警戒したのが漢字の多用だった。戦前から柳田は、官僚の作った公文書用の言葉が日本語を窮屈なものにしたと指摘していた。さらに民間でも、漢字が多用されていることをもって、それを理解していなくとも、これをありがたく受け取るという傾向が生まれ、必要を超えて無理やり漢字を当てはめることで、本来の意味からずれる多くの宛字が生まれ、解釈上の混乱を招いたとした。「めいめいの思う言葉」を阻むものがあるとすれば、それは民間の理解を超えて使われる言葉だった。

戦後、漢字は制限を前提としながら教育政策に反映される。その第一歩として一九四六年一一月、内閣訓令として「当用漢字表」となる計一八五〇字が官報に掲載された時、柳田は「今重宝している色々の漢語も、多分は追々に消えて行き、日本は殊に用語の足りない国になる危険がある」と、用途の是非を問わず制限することを諌（いさ）める一方、「日本語固有の造語力を活用して、早く今のような動詞、形容詞の衰弱を補強しなければならぬと思うのだが、それにも最も有力なる働き手は民衆である」とした。形容詞、動詞のような、生活から現れる感情を率直に反映する言葉を豊かにす

ることを柳田は求めたのである。

その際、柳田が注意を呼びかけるのは、言葉の選択のされ方である。「少数者によって急激にされた事には、反動が来る。だから私は、「いつの間に行われたか分からないような変革」に賛成する」として、民間が普段の生活の中で行う言葉の選択が、日本語の改革につながっていくことを期待した。

柳田がとりわけ信を置いた文章家に中野重治がいる。戦中に書いたもの、戦中における態度を通して、両者の間には戦後においても、互いの発言に対し注目する関係が続いた。戦後における両者の言葉に対するスタンスを知る上で、『展望』一九四七年一月号で行われた対談「文学・学問・政治」が参考になる。編集部によって多くの話題が提出されているが、そのほとんどは、柳田が戦後、民俗学が考えるべきケン案事項として想定したものである。その中に「敬語の将来」と題して、二人が戦後の日本語を育てる上で敬語をひとつの稽古台として考えるくだりがある。その際中野は、敬語の制限とはまず、自分たち言葉に携わる職業をしている者から試みるべきだとする。すると柳田は、「そう、特に左傾の側がそれを主張しなければならない」と応じた。

対談者が中野である、という限定がつくが、柳田は体制変革を説いてやまない戦後の社会主義者に向かって、混乱した敬語の現状を伝えた上で、それを改善する実現可能な範囲を示してみせた。筋の通った保守主義者であり続けた柳田をみる時、この発言は破格である。既存の民間習俗が蓄積してきた合理性を重んじながら、改めるべきところは改める、その試みを続けていくことで、漸進的に日本語がいい方向へ向かうことを柳田は念じていた。

（鶴見太郎編『日常からの挑戦』「解説」より）

問一　傍線部1～3にあたる漢字がカタカナ部分に使われている語をそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

1　イ　豪カ　ロ　カ面　ハ　舌カ　ニ　カ橋　ホ　カ半

2　イ　キ篤　ロ　禁キ　ハ　キ図　ニ　回キ　ホ　キ抜

3　イ　ケ身　ロ　露ケン　ハ　ケン呈　ニ　越ケン　ホ　ケ念

問二　空欄 A に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　日々の生活を思索の場とした政治学者

ロ　観察や実験を繰り返した科学者

ハ　ゆがみの少ない仕事をしてきた人物

ニ　戦争に協力しなかった平和主義者

ホ　誤りをけっして認めなかった者

問三　傍線部甲「柳田が抱いた慚愧の念はひときわ強いものだった」の理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ　生活改善を進めるはずの民俗学が、戦争によって否定されてしまったと思えたから。

ロ　戦争を止めることができなかった民間の力にたいし柳田が期待をもてなくなったから。

ハ　戦争とその無残な結末は、柳田が民俗学で描いていた健全な展望と大きく異なったから。

ニ　生活体験から身に付く判断と社会全体の判断とは、結局は別物と柳田が考えたから。

ホ　「帰納による当然の結論」を早く出しておけば敗戦はなかったと柳田は悔しく思ったから。

問四 空欄 **B** に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 過剰な情報に惑わされない洞察力をいかに民間に与えるか
ロ 鋭い洞察力を民間にひろめて、どう平和な社会を維持していくか
ハ 外部の出来事に左右されない民衆独自の洞察力をいかに育てるか
ニ 戦争体験を経なくても可能な民衆の洞察力をどう磨くか
ホ 身近な事柄を通していかに民間の洞察を深めていくか

問五 本文中に示される、戦後の国語教育において柳田が目指したことに**合致しない**ものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 聴く力を高め、各自が考える習慣をつけること。
ロ 生活に根ざし、感情を反映させるような日本語を確立すること。
ハ 読みやすい書き言葉として、漢字・漢語を多く使うこと。
ニ 日本語の造語力を活用し、民衆の言葉を豊かにすること。
ホ 急激な変革を避け、ゆっくり改革を進めること。

問六 本文中に示される柳田の敬語観に**合致しない**ものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 敬語には、人々が長い時間をかけて育んできた合理性があるので、尊重する必要がある。
ロ 敬語を無批判に使用することは、結果的に混乱を導くことになり、望ましいことではない。
ハ 敬語の背景にある上下関係の打破を目指す社会主義者は、率先して敬語の制限を推進すべきである。
ニ 敬語の正しい使い方を学ぶことが稽古台となり、正しい日本語を学ぶことができる。
ホ 敬語は固定されたものではないので、戦後にふさわしい使用法を改めて検討すべきである。

問七 この文章を説明する記述として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 柳田国男は日本人の戦時中の態度を自ら検討し、その反省のうえに立って民衆自身が思考を深めることが重要だと主張した。
ロ 柳田国男は、習俗の研究を通して民衆についての洞察を深めることが民俗学の真髄だと考えた。
ハ 柳田国男は漢字を制限する日本語改革を批判し、戦後の民俗学が民衆の生活から現れる感情を反映する言葉を否定したと結論づけた。
ニ 柳田国男は目先の情報に流されがちな民衆の生活改善を日本語改革によって行い、叡智が欠落している民衆の学習能力を高める方法を模索した。
ホ 柳田国男は、戦後の情報社会のなかで日本が強く生き抜くために、土台の日本語を民衆が学習し直すことを推奨した。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

武井麻子の『感情と看護』は優れた看護の本だが、その最後の部分で「負の能力」という概念を紹介している。

多くの精神療法家が好んで引用する言葉に、キーツの詩に出てくる「負の能力」という言葉があります。負の能力とは、「不確かさ、不思議さ、疑いのなかにあって、早く事実や理由を掴もうとせず、そこに居続けられる能力」のことです。もともとは詩人にとって不可欠の能力としてキーツが語ったものですが、精神療法家にも同じ能力が必要だというのです。何かができる能力でなく、何もできない無力感や空しさに耐える能力のことです。（土居健郎『新訂　方法としての面接』）

[a]、この「負の能力」こそ、哲学する能力と言っていい。「不確かさ、不思議さ、疑いのなかに……居続けられる能力」は、一見消極的態度に見えるが、そうではなく、何ごともごまかさずに見てみれば、考えてみれば、感じてみれば、不確かで不思議なことばかりである。でも、日常生活においては、とにかくいま起こった事態を何らかの仕方で処理し結果を出さねばならず、「そこに居続ける」ことはほぼ禁じられる。

哲学者という人種が何らかの存在意味を持ちうるとすれば、ほとんどの人がこうして首をかしげながらも絶え間なく次へ次へと進んでいく中で、そうすることを拒否し、「私が死後無に帰するのなら、私の人生に何の価値もない」という言葉が示す場所に居続けることだ、二〇歳のころ私はそう思った。

[b]、哲学者はあらゆる科学者とは区別される。科学者とは、いかなる対象にかかわろうと、やはり「客観的なもの」にかかわっている。その最たるものが、客観的世界である。それは、私の存在とは関係なく存在していて、いや私をその微小な一部として取り込む広大な世界である。それは、時間的には一五〇億年以上も続いた世界であり、空間的には五〇億光年を超えて広がる世界である。

この世界のうちに、私は自分の意志ではなしに生まれさせられ、もうじき死んでいくのだ。そして、私が死んだあともこの広大な世界はどこまでも存在し続けるのだ。

私は、長くこうした宇宙論的図式のうちにいて、その[x]苦しみ続けてきた。こうした大枠のもとに私が生きるのだとしたら、いかによく生きても虚しいからだ。だから、私はこの宇宙論的図式をはじめこの世界についてのさまざまな客観的知識を（得るためにではなくて）むしろ捨てるために、それが虚構とわかる新たな図式を見いだすために哲学を志した。

哲学を続けるうちに、この宇宙論的・客観的図式こそ、最も手ごわいように見えて、そのじつ最も脆い図式なのだということが次第にわかってきた。それは、「哲学の力」で破壊することができる。そう予感し、少なくともこの図式が消滅するなら、死ぬのはそれほどの恐怖ではなくなり、生きるのはずいぶんラクになるだろう、[A]。

しかし、客観的世界がまやかしであるという了解は「頭で」わかっただけではだめなのだ。身体全体で了解しなければならないのである。しかも、負の能力を鍛え上げることによって。

負の能力を伸ばすのは大変である。なぜなら、世の中ではすべて（負ではなくて）「正」の能力を開発することが期待されているのだから。ほとんどの人は、「存在」や「時間」や「自由」や「偶然」や「因果律」や「私」や「善」など、世界の秘密について気になりながらも、それにかまけることのないまま、ある日ふっと息を引き取る。

でも、何かの折に（失恋したり、愛する人を亡くしたりして）、生きていることが耐え難くなり、「一体自分の生きている世界とは何だろう?」と心の底から疑問に思って周囲を見回したとたん、これまで理解していたかのように思い込んでいたこれらの[y]は、じつは果てしない不確実さ、不思議さのうちにあることを悟る。

いままで自分を苦しめてきた事柄のほとんどは、「こうだ」と決めてかかったことに基づいていた。どうもそのすべてが朝靄のようにとりとめもないものであるらしい、これを全身で実感するとき、彼（女）はほっと救われるような気がする。

[c]、ほとんどの人は（心の傷が癒されふっと幸福を感じることがあり）油断するとここで留まってしまい、また普通の世界に戻っていくのだ。

（中島義道『明るいニヒリズム』より）

問八　空欄 a ～ c に入る最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ（同じものを二度用いてはならない）。

イ　そのため　ロ　しかも　ハ　たとえば　ニ　あるいは
ホ　まさに　ヘ　すると　ト　しかし

問九　空欄 x と y に入る最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

x　イ　合理性に　ロ　不条理に　ハ　非情さに　ニ　哀しさに　ホ　愚かしさに
y　イ　概念　ロ　疑念　ハ　正義　ニ　事実　ホ　仮定

問十　著者は、傍線部甲「宇宙論的・客観的図式」についてどのように考えているか。著者の考えに**合致しない**ものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　強固に見えて実は脆弱で、哲学的に論破可能であると考えている。
ロ　科学者の宇宙論と哲学者の宇宙論は厳密に分けられず、相互に補完しあうと考えている。
ハ　一見科学的に見えるために騙されやすい図式であると考えている。
ニ　科学者的・客観的世界に対抗する、哲学者独自の宇宙論が可能ではないかと考えている。
ホ　広大な世界のなかで自分を取るに足らない存在として認識してしまうと考えている。

問十一　空欄 A に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　むしろこの図式を破壊することに快感さえ覚えるようになると思われた
ロ　不確かさ、不思議さ、疑いを楽しむことができるように思われた
ハ　虚しさにがんじがらめになって生きることだけは避けられるように思われた
ニ　死もまた意味のある出来事だと信じることができるようになると思われた
ホ　虚しさを原動力として生き続けていけるように思われた

問十二　本文中、繰り返し言及されている「負の能力」の内容に合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　理論が先行する科学者的世界観の虚偽を見抜き、むしろ自分の実感を優先して自己を守る能力
ロ　日常生活が破綻を来すときに起こる人生に対する虚しさを払いのけ、客観的知識をもって世界を洞察する能力
ハ　精神療法家に必要であるが哲学者にも重要な能力であり、一般の人間にはとうてい持つことが不可能な能力
ニ　最終的に死ぬのだから人生には意味がないとして、消極的に生きることをあえて選択する能力
ホ　日常生活における懐疑や心許ない感覚に対して、早急に解決しようとせず疑問として抱え続ける能力

問十三　本文の内容に合致するものを次の中から**二つ**選び、解答欄にマークせよ。

イ　精神療法家は詩人と同じ能力が必要とされる。
ロ　ほとんどの人は存在や時間や自由について深く考えることをしない。
ハ　前向きに生きるためには負の能力が必要である。
ニ　哲学者の存在意義は負の能力を鍛えることにこそある。
ホ　哲学者は客観的世界が存在しないことを自明だと考えている。
ヘ　哲学者は日常生活と無縁に生きている人種である。

（三）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

美作守顕能のもとに、いやしからぬ体の僧一人出で来りて、法華経 A つづり読みけり。守これを聞きて、「うちまかせたる乞食にはあらざめり。いかなる所よりいかやうなる人の来れるや。」と問はしむるところ、答へていはく、「乞食にはべり。門ごとに乞ふ態をば仕らず。西山の辺にさぶらふが、いささか申し上ぐべきことはべりて参上するところなり。」と云々。もの言ふ気色など様 I 、くはしく問ふところ、「申し出づるにつきていと異様なることにははべれど、あるところの青女房をあひ語らひて、洗濯などあつらへはべるが、思はざるに懐妊のことさぶらふ。今月その期に当りてはべり。ひとへにおのれの過ちによりさぶらふゆゑ、彼が籠居してさぶらはむほど、形のごとく活命の計を与へばやと思ひたまふるが、その計略無くさぶらふ間、もし御哀憐もやさぶらふとて。」と、いとつつましげに言ふを、ことの体は誠に II 、心中察せられて B ば、「安きほどの事。」とて、押し量りて、夫一人に持たせて、そへ遣はさむとするところ、「みづから持ちてまかり帰るべし。」とて、持たるるほど負ひて出づるを、家主なほあやしみ思ひて、ものに心得たる雑色を一人つけて、さまをやつして、みかくしみかくしに行く間、北山の奥をはるばると分け入りて、人跡絶えたる深き谷のはざまに至りぬ。方丈の庵室の内へ入りて、ものをうち置きて、「あな苦し。三宝の御助けなれば、安居の食もまうけたり。」とひとりごちて、足うち洗ひてしづまりぬ。この使、a 不思議に聞き居たり。日も暮れぬれば、帰洛することあたはず、木の本に居たり。夜やうやく深更に及びて、法華経を読みたてまつる声、あはれにたふときこと、喩へにとるにもの無し。随喜の涙千行す。天の曙くるを待ちて帰洛して、主君にこの子細を語るところ、「さればこそ、b ただなる人にあらずとは見き。」とて、両三日の後、案内して言はく、「思はざるに安居の御料と承はれば、一日のものは定めて不足にはべるか。よりてこれを献ぜしめむ。」とて、長櫃一合に様々のもの調へ入れて、この雑色あひ具して遣りたりければ、c 明り障子の内に読経してありけるが、障子をひきあけてうちみて、あさましげに思ひて、d ひきたてて返答に及ばず。数剋になりければ、庵室の軒にものをばとり置きて帰りをはんぬ。その後また十日ばかりありて、訪るるのところに、今度は人もなくて、先のものをばとりて他所へ移りたりとおぼしくて、後の度の送り物をばさながら置きたりければ、禽獣みな食ひ散らして、所々に散りたりけり。たふとかりける僧なり、と云々。

（『古事談』より）

問十四　空欄 A と B に入る語として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ（空欄には適切に活用させた形が入るものとする。同じものを二度用いてはならない）。

イ　いとほし　　ロ　かなし　　ハ　くるし　　ニ　たふとし　　ホ　なつかし

問十五　空欄 I には、次のイ～ニを組み合わせた文言が入る（活用する語は適切に活用させるものとする）。適切に並べ替えた場合、**二番目にあたる**ものはどれか、解答欄にマークせよ。

イ　体　　ロ　あり　　ハ　なり　　ニ　ば

問十六　空欄 II に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　空漠なれど　　ロ　相応なれど　　ハ　至当なれど　　ニ　存外なれど　　ホ　分明なれど

問十七　二重傍線部イ～ホの敬語表現のうち、敬意の対象が一つだけ他と異なるものを選び、解答欄にマークせよ。

問十八　傍線部a「不思議に聞き居たり」について、なぜ不思議に思ったのか、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　乞食僧の生活の様子を見届けにきただけなのに、思いもよらず山中で野宿するはめになったため。
ロ　乞食僧が、とても人間が住めるところとは思えないような山奥で暮らしていることに驚いたから。
ハ　乞食僧の山中での生活が、美作守顕能に説明したこととずいぶん異なっているように思われたから。
ニ　乞食僧の身分で、自分は三宝の援助者であるなどと発言したことが、不遜な言い方に感じられたから。
ホ　乞食僧は西山辺に住んでいるといったのに、実際には北山の奥に居を構えていることが不審に思われたから。

問十九　傍線部b「ただなる人にあらずとは見き」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　ひねくれている人だと思った
ロ　ふつうの人ではないと思った
ハ　正直ではない人であると思った
ニ　清貧に生きる人なのだと思った
ホ　道理が通じる人ではないと思った

問二十　傍線部c「遣り」・d「思ひ」の主体の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　顕能・僧
ロ　僧・雑色
ハ　雑色・僧
ニ　顕能・青女房
ホ　雑色・顕能

問二十一　本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　北山の僧は、仏道修行のためとはいえうそをついてまで食料を調達する生活を不本意なものと感じており、そのことを美作守顕能に見破られてしまったことを苦にして、逃亡した。
ロ　北山の僧は、身辺の世話をさせていた女性を妊娠させてしまったが、山中の生活では仏道修行に怠りなく務める一方で、妊娠させた女性を見捨てることもなく、熱心に世話をしていた。
ハ　乞食僧の素性に不審を抱いた美作守顕能は、雑色一人を供につれてみずから僧の後を追い、その正体を見あらわしたが、正体を知られた僧はそのことを不快に思い、行方をくらませた。
ニ　美作守顕能は、出家者でも異性に関心を持ったり子どもをもうけることは、人情として自然なことだと思える寛容さを持っていたが、それがかえって北山の僧の不興をかうこととなった。
ホ　北山の僧は、美作守顕能から受けた施しのうち、自分で背負って持って帰ったものは北山を退去する際にも持ち去ったが、後日届けられた長櫃に入ったものにはまったく手をつけなかった。

〔以　下　余　白〕